芳年・年方の活動に見る明治期浮世絵師の開拓

出口眞結（学習院大学）

明治時代以降、錦絵は新聞や写真など新たな情報媒体にメディアの先頭を奪われ衰退期を迎えた。先行研究では、錦絵を出版していた版元が顧客の損失による売り上げの低下によって安価な錦絵ばかり制作し、更に買い手を失って市場を保てなくなったことが要因に挙げられている。錦絵の市場縮小に対して浮世絵師は版元を離れ、展覧会へ出品する日本画の制作に注力する傾向が見られた。本発表では、この時期に活動の幅を広げた浮世絵師の一例として、歌川派の画系にある月岡（大蘇）芳年（1839-1898）と水野年方（1866-1908）の師弟に注目したい。年方の弟子・鏑木清方（1878-1972）曰く、芳年は「卑しめられた畫格の向上」を志し、年方もまた重んじて一生の仕事にしたという。「畫格の向上」とは何か。その意味を紐解く時、芳年・年方も傾向と同様に展覧会へ出品した活動があるため、当時の錦絵界の状況からそれが該当すると考えられるが、発表者は二者それぞれが行った作品媒体の開拓を行った活動もまた「畫格の向上」にあたると考えた。

芳年は新聞の登場に伴い、新聞記事を元に制作した錦絵「錦絵版画」を『郵便報知新聞』と、新聞の附録として制作した錦絵を『やまと新聞』と協力して手掛けた。人物の遠近描写や人体描写に写実性を取り入れながらも、特に後者では役者絵・美人画の伝統的な「浮世絵」の形式を取り入れている。新聞と錦絵との共存を志向し、描法によって新奇性を与えながら民衆の暮らしの中に旧来の「浮世絵」を残そうとしたと見られる。

年方は、錦絵では武者絵に長けた芳年の影響から歴史的主題を取り入れた風俗画や美人画を手掛け、雑誌『文芸倶楽部』では掲載作品と関連した木版多色摺りの口絵を依頼され掲載した。本発表で注目するのは三井呉服店と連携して制作された錦絵連作「三井好都のにしき」である。広告効果を持つ浮世絵は江戸時代から存在するが、本作は四季折々の風景と商品である着物をまとった女性の全身像が生き生きと描かれている風俗画であり、緻密な刷りが芸術性の高い刷り物ながら顧客に配られたとされる形式はチラシ・ポスターに近い。年方は近代的な広告作品を三越の美術事業上において早期に手掛け、錦絵の木版多色刷りの特徴を広告デザインの一形式として成立させた。

芳年・年方の目指した「畫格の向上」は浮世絵から日本画へ傾倒したばかりではなく、片や錦絵を衰退させた新メディアとの共存を体現し、片や木版多色刷りの特色を広告デザインに落とし込み、錦絵が活躍する媒体の開拓を行って浮世絵師の地位向上に励んだものと考える。そして二者の活動は、明治期の浮世絵師が日本画家の道を選ぶ他にある在り様を模索し、それが長期的に存続せずとも実を結んでいたことを示している。それは現在語られる、商業美術と展覧会美術との優劣を述べる当時の価値観に対して揺らぎを与える内容だと言える。